

染色技法書に見られる豆汁の役割

－寛文6年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として－

菊池理予

はじめに

東京文化財研究所では、平成26（2014）年度より染織文化財の材料や技法に関する基礎研究を開始した。後世へ受け継ぐべき染織技法を検討するため、さらに受け継がれた染織文化財をより良い状態で保存継承するには、材料に関する基礎的な研究が必要である。近年では、染織文化財の染料や媒染剤などの化学的な調査は進みつつある。しかしながら、それらと照合できる総合的な歴史資料のレファレンスデータは未だ少ない。

先行研究では、茶・鼠系統の染色については和田、片岸ら¹⁾、黄系統については石井、齊藤ら²⁾、赤系統については深津、小松、齊藤ら³⁾、紫系統については福岡、笠作、齊藤ら⁴⁾の研究があり、染織技法の復元では河上ら⁵⁾の報告が上げられる。これらは近世における染料・媒染剤の受容と変遷、流行色等を中心とするものである。染織史領域全体では、その模様様式や意匠を考察するものが大半であり、その意匠をどのような材料・技法で製作したかといった包括的な研究はこれから進めるべき課題といえる。

こうした状況のなか、染色材料の中で研究があまり進んでいないものに豆汁がある。これまで、豆汁については土井⁶⁾、稲垣⁷⁾、長野・阿部ら⁸⁾などが注目し、その木綿布への染色上の効果についてまとめている。土井は豆汁を引くことで染着がよくなるが、35日以上経過するとかえって染色効果が悪くなるということ、稲垣、長野、阿部らは豆汁を引くことで染色の際ににじみを少なくする効果があること、それらは濃度や引く回数等で異なること、大豆蛋白の凝固状態が適当でないと丁度良い防水性は得られないことを明らかにしている。これらは近世までの植物染料による染色方法についてではなく、合成染料が導入されて以降の技法を対象として検討されたものである。

一方、豆汁は『日葡辞書』（慶長8〈1603〉年）にすでに染色の材料としての記述が見られ、染色材料として重要な位置を占めているものの、近世以前の染色技法書等の資料における実態についての報告はない。

今回、『染料植物譜』（昭和12〈1937〉年）に掲載されている慶安4（1651）年以降に刊行された染色技法書から、豆汁に関連する項目を抽出した（表1）。このうち、豆汁に関する記述が多いものを時代順に見ていくと、『紺屋茶染口伝書』（寛文6〈1666〉年）に25件、『秘伝徳用諸色手染草』（明和9〈1772〉年）に8件、『紺屋仁三次覚書』（天明4〈1784〉年）に9件、『染物秘伝』（寛政9〈1797〉年）に29件、『染物屋覚書』（享和3〈1803〉年頃）に10件あり、記載件数も、その記述内容も一様ではない。

そこで本稿では研究の取り掛かりとして、『紺屋茶染口伝書』（寛文6〈1666〉年）を中心に豆汁に

表1 豆汁の記載が確認できる技法書（『染料植物譜』所収）一覧

書籍名	出版年	出版地	出版社	著者	豆汁*3 該当数
『聞書秘伝抄』	慶安4(1651)刊	—	—	—	1
『紺屋茶染口伝書』	寛文6(1666)刊	柳馬場通押小路下ル町	繪筆屋勘右衛門板本	—	25
『諸芸小鏡』	貞享3(1686)刊	京高辻通鷹金町、 江戸常物町、 大坂心齋橋筋呉服町角	中村孫兵衛、 本屋清兵衛、 岡田三郎右衛門	洛下之隠士弾松軒閑窓	2
『萬染物張物相伝』	元禄、宝永 (1688~1710)刊	—	—	—	12
『女四季用文章 女小学教草』	享保10(1725)刊	大坂心齋橋南壹丁目	書林 敦賀屋九兵衛版	書：佐藤慎一郎、畫：大石眞虎、 彫：樋口與兵衛	1
『国花万宝 日本居家秘用』	享保16(1731)刊	—	—	—	1
『秘伝徳用 諸色手染草』	明和9(1772)刊	京都寺町三条下ル	書林 田中屋半兵衛板	—	8
『更紗便覧』	安永7(1778)刊	江戸日本橋通壹丁目、 京都三條通高倉東江入ル	御書物師 出雲寺和泉掾	蓬萊山人歸橋	1
『紺屋仁三次覚書』	天明4(1784)写	大坂北久寶寺町三丁目、 三休橋筋南へ入東側	製本所 花本安次郎	西照寺村紺屋仁三次 『更紗圖譜』増補 華布便覧』を 稲葉通龍が補正。	9
『更紗図譜』	天明5(1786)刊	—	—	紺屋清三郎	3
『染物秘伝』	寛政9(1797)写	—	—	—	29
『染物屋覚書』	享和3(1803)頒刊	—	—	—	10
『染物重宝記』	文化8(1811)刊	江戸大傳馬町二丁目、 同日本橋白銀町四丁目、 大坂心齋橋北詰、 京三條寺町西	書林 大和田安兵衛、 同忠助、 芳田宗三郎、 菊舎太兵衛	—	5
『中陵漫録』	文政9(1826)刊	—	—	本草家佐藤成裕	1
『機織彙編』	~文政9(1830)刊	—	—	下野國黒羽藩主大關増業	5
『民家日用 廣益秘事大全』	嘉永4(1851)刊	京都寺町通佛光寺、 江戸、 大阪	河内屋藤四郎外十軒、 須原屋茂兵衛以下八軒、 河内屋藤兵衛以下二軒	浪華市隠三松館主人の編輯	1
『錦囊智術全書』 (合本、別タイトル6冊のうち2冊該当) ①『拾玉智恵海』 ②『拾玉続智恵海』	~嘉永4(1851)刊	大坂	書肆 河内屋新次郎	—	2
『染物早指南』	嘉永6(1853)刊	江戸	書肆 野村新兵衛	編述：好染翁、画：一勇齋國芳	7
『重宝 日用染物伝』	年代不明、版本	東都か？	—	—	2
『縁形 染風呂敷伝書』	明治4(1871)写	—	—	正畫堂觀禮	2
『日本染法』	年代不明、写本	—	—	—	25

※1.後藤捷一『染料植物譜』染織と生活社、昭和55(1980)年より作業を行った。

※2.旧字体は現代字体へ変換している。

※3.豆汁該当数は項目内に複数回記載のある場合は1項目につき1件としてカウントしている。

関する記述内容を整理し、近世における豆汁の用途と効果について考察する。

1. 『紺屋茶染口伝書』（寛文6〈1666〉年）

『紺屋茶染口伝書』は筆者不詳で、上巻24項、下巻28項にわたって技法が記されている。同書は白井文庫本（国会図書館所蔵）と京都府立図書館本がある。この2冊は同版と考えられ、虫損やしみでの欠落を補いながら校合したものが『染料植物譜』（昭和12〈1937〉年）として出版されている。奥付は京都府立図書館本にしか見られず、刊記は「寛文六丙午曆仲春（二月）仲七 柳馬場通押小路下ル町 絵筆屋勘右衛門板本」である。

同書には「まめ」という言葉が見られ、これが豆汁を示していると思われる。この「まめ」には「引く」という言葉を伴うことが多く、豆のままでは「引く」（刷毛で引く）ことができない。そのため、この「まめ」は豆汁と同義と考えて差し支えないであろう。

「まめ」の記述は、上巻の「同（廿三：筆者註）もめんのそめやう」の1項、下巻「第一 まめの引やう」以降24項に確認された（表2）。同書の大半は型染や無地染の方法を色ごとに記すものである。「まめ」は、1項目で3回ほど登場する場合もある。それは糊置きや染色の前後であり、色の定着（染着）、糊の保護、色止め（コーティング）、色の均整化（にじみ止め）の目的が含まれていると考えられる。

1-1 『紺屋茶染口伝書』（寛文6〈1666〉年）に見られる「まめ」（豆汁）の製法

寛文期において豆汁はどのように作られていたのだろうか。同書には豆汁の製法については記述がないため、『染料植物譜』所収の他の染色技法書から、豆汁の製法に関連する項目を参照した。

豆汁の製法については以下の6冊に記載があった。

- ①『萬染物張物相伝』（元禄、宝永期）⁹⁾
- ②『更紗便覧』（安永7〈1778〉年）¹⁰⁾
- ③『更紗図譜』（天明5〈1785〉年）¹¹⁾
- ④『拾玉智恵海』（～嘉永4〈1851〉年）¹²⁾
- ⑤『拾玉続智恵海』（～嘉永4〈1851〉年）¹³⁾
- ⑥『染物早指南』（嘉永6〈1853〉年）¹⁴⁾

何れの記述においても何らかの豆（白まめ、まめ、黄豆、大豆、生豆）¹⁵⁾を使い、つぶしやすくするために季節によって水に漬けておく期間を変え、ふやけた豆に水分を含ませる。その後、すり鉢で摺って木綿布等で漉している。この製法は現代の染色技法で使用する豆汁とも同様であり、おそらく『紺屋茶染口伝書』の豆汁も同じ製法によるものと推察される。

1-2 『紺屋茶染口伝書』（寛文6〈1666〉年）に見られる「まめ」の濃度

『紺屋茶染口伝書』の記述には、豆汁の濃度についての記述が多くみられる。豆と水の比率については、前述の『萬染物張物相伝』と『更紗図譜』に記されている。『萬染物張物相伝』には、水に

表2 『紺屋茶染口伝書』に見られる豆汁の記述一覧
表2、『紺屋茶染口伝書』に見られる豆汁の記述一覧

巻	見出し	本文	豆汁						型染:型 無地染:無 その他
			しろ まめ	くろ まめ	鼠 まめ	くろ ちや	まめ	わかき まめ	
上	同※ もめんのそめやう (※筆者註。「同」は「第廿三 けんぼう よしをか乃家の口 傳」)	かわ三しほそめ。其うへに右之のごとくにかね一篇つけ。又そのうへにかわ三しほ染。又そのうへにかね一べんつけとめ申候。これも上にて候はうへのとめに。かわ一べんつかひ申候しぜんこもんなど此傳に染申ときは。かたつけて其うへにしろまめなるほどく候を二へんひき。其うへに中ねずみよりこく候まめを一べん引。うらへかねのしまぬほどにまめを引まへのもめんぞめのごとくに。しよににかけてひき申候。但もんどころにても。惣じて白き所にくろみつき候は。むめのすにておとし申候。もしむめずなく候は。ゆのすにてもおなじ事にて候。	○		○				その他
下	第一 まめの引やう	惣じてきぬのたぐひ。地のあつき物には。まめなるほどくして引申候。又地あひうすきものには右之よりうすくして引申候。とかくもめんにてもきぬにて。地あひやうすを見はからひかんように候。					○		その他
下	第五 つねの茶こもん	かたをつけて。しろまめなるほどく候を一べん引。又其うへにうすねずみ程なるまめを一べん引。又中ねずみほどなるまめ一べん引そのうへにかりやす二へん引申候。但一べんくにてほし付。又其うへに右之かりやすに少みやうばんをくわへ引申候。	○		○				型
下	第六 みるちやこもん	かたをつけて。其うへにしろまめなるほどく候を一べん引。其うへに中ねずみのまめ一べん引。又其うへにこいねずみ程なるまめ一べんひき。さて其うへにかりやす二へん引。又其うへに右之かりやすにみやうばん少くわへてとめに引申候。	○		○				型
下	第七 きがらちやこもん	かたつけて。其うへにしろまめこく候を三べん引又其うへにかりやす三べん引。うへのとめにかりやすにみやうばん少くわへ一べん引申候。	○						型
下	第八 えどちやこもん	かたつけて。しろまめこく候を二へん引。其上にうすねずみなるまめ一べん引。又其上にかりやす二へん引。うへのとめにかりやすにみやうばん少くわへ一べん引申候。	○		○				型

巻	見出し	本文	豆汁					型 無地染:無 その他		
			しろ まめ	しろ まめ	くろ まめ	鼠 まめ	くろ ちや		まめ	わか まめ
下	第九 からちやこもん	かたつけて。其うへにしろまめ一ぺん引。又其うへにうすねずみほどなるまめ二へん引。又其うへに中ねずみ種なるまめ一ぺん引。又そのうへにむめとかりやすと半分づゝ合て二へん引。さて其上のとめにかりやすにみやうばん少くわへ引申候。	○		○					型
下	第十 あをちやこもん	かたつけて。しろまめこく候を一ぺん引。其上にねずみ程なるまめ一ぺん引。又其上に中ねずみほどなるまめ一ぺん引。又其上にかりやす二へん引。其上にかりやすにみやうばん少くわへ一ぺん引申候。ほしあげてしゝにかけてうすく候二ばんあいにさつとそめあげぬれながらすゝぎほし申候。とかくあいのてまはしはやくやうにそむる事かんように候。	○		○					型
下	第十一 こびちやこもん	かたつけて。しろまめこく候を一ぺん引。其上にねずみ程なるまめ一ぺん引。又其上にしろちやのまめわかきまめを一ぺん引。其うへにかりやす二へん引。其上にかりやすにみやうばん少くわへとめに引申候。	○		○			○		型
下	第十二 との茶こもん	かたつけて。其上にしろまめこく候を一ぺん引。ねずみほどなるまめ一ぺん引。又其うへに中ねずみほどなるまめ一ぺん引。其うへにかりやす一ぺん引。又其上にもゝかわ二へん引。うへのとめにかりやすにみやうばん少くわへひき申候。	○		○					型
下	第十三 もえきこもん	かたつけて。しろまめこく候を一ぺん引。又うすねずみほどなるまめ一ぺん引。其うへに右之より少く候まめ一ぺん引。又其上にかりやすを二へん引。うへのとめにかりやすにみやうばん少くわへ。一ぺん引。ほしあげてしゝくりにかけて。こきあいに右あをちやより少まをあらせそめ申候。但こもんにてもちらしにてもかくのごとくに候。	○		○			○		型
下	第十四 同※ 無地 (※筆者註。「同」は「第十三 もえきこもん」)	したぢにうすきしろまめ一ぺん引。又其うへをうすはな色にそめ。又其うへにかりやすを四へん引。うへのとめにかりやすにみやうばん少くわへ一ぺん引。ほしあげてうへをさつとあいに染そのまゝすゝぎ申候。	○							無

巻	見出し	本文	豆汁					型染:型 無地染:無 その他
			しろ まめ	くろ まめ	鼠 まめ	くろ ちや	まめ	
下	第十五 かばがへし	下地を。むめ二へん引。もゝかわ一ぺん引。又其上をかりやすにみやうばんを少くわへ一ぺん引。ぬれながらすゝぎほしあげて。其上にかたつけて其上をしるまめこく候を一ぺん引。又其上に中ねずみほなるまめ一ぺん引又其上になるほどくろまめ一ぺんひき。又そのうへにうすねずみほなるまめに。いしばいなるほど少くわへとめに引申候。	○	○	○			型
下	第十七 ねずみかへし	下染あさぎにそめ。其上にかたつけてしるまめこく候を一ぺん引。中ねずみほなるまめ一ぺん引申候。	○		○			型
下	第十八 くろ茶けんほうこもん	かたつけて。しるまめなるほどこく候を一ぺん引。中ねずみほなるまめ一ぺん引。其上にいかにもくろまめ一ぺん引。其上をもゝかわ二へん引。うへのとめにかね一篇ひき申候。	○	○	○			型
下	第十九 くろべにかのこ	かたつけて。しるまめこく候を一ぺん引。ねずみほなるまめ一ぺん引。又くろまめ一ぺん引。其上にすはう二へん引。うへのとめにかねにみやうばん少くわへ引申候。	○	○	○			型
下	第廿 あかべにかのこ	かたつけて。しるまめこく候を三ぺん引。又其上にすはう四へん引。但一へんくにてほしつけて水にみやうばんを粉のふくほどあはせ。とめに引申候但此そめやう大事にて候。もしわう引申候とさうらへしみ候は。又しるまめを一へんにても二へんにてもうらへぐらぬやうに引申事かんようにて候。但きぬにてもめんにてもおなじ事にて候。	○					型
下	第廿一 むらさきかのこ	かたつけて。しるまめ一ぺん引。又うへにねずみほなるまめ一ぺん引。其上に中ねずみ程なるまめ一ぺん引。其上にすはう三ぺん引。又うへのとめにかねにみやうばん少くわへ引申候。	○		○			型

巻	見出し	本文	豆汁					型 無地染:無 その他	
			しろ まめ	くろ まめ	鼠 まめ	くろ ちや	まめ		わかき まめ
下	第廿二 とくさ	もえぎのわかき物にて候。しろまめのうへを中あさぎにそめ。残りはみなもえぎのごとくにそめ申候。	○						無
下	第廿三 くろかき無地	下そめに。むめ二へん引。其うへに中鼠のまめ一へん引。又くろきまめに石ばい少くわへ二へん引申候。		○	○				無
下	第廿四 うすがき	すなはちうすがきつちをば。ねばりとすりてしろまめうすくして土にまで合て無地ならば一ぺんこもんならに二へんひき申候。	○						無
下	第廿五 かきこもん	かたつけて。しろまめなるほどこく候を一へん引。其上にねずみほどなるまめ一へん引。其上にうめを三へん引。又其上にうすねずみ程なるまめをこくして。石はいを少くわへ二へん引申候。	○		○				型
下	第廿六 くりむめこもん	かたつけて。其上にしろまめこく候を一篇引。又其上にねずみ程なるまめ一へんひき。其うへに中ねずみほどなるまめ一へん引。其うへにむめ三へん引。其上に中ねずみ程なるまめこく候を。石ばい少くわへて二へん引申候。	○		○				型
下	第廿七 同※ くりむめ無地 (※筆者註。「同」は「第廿六 くりむめこもん」)	下にむめ二へん引。中ねずみほどなるまめのこく候に。いしばい少くわへて二へん引申候。			○				無
下	第廿八 べにかき	したにむめ四へん引。其うへにしろまめにいしばい少くわへ四へん引申候。	○						無

註. 本表は『染料植物譜』(昭和12<1937>年、577-597頁)を参照し作成した。

漬けておいた「白まめ」「まめ」2合をすり鉢で擦り、そこに水1升程度を入れて、木綿布で濾す。尺貫法で比率を計算すると約17%の濃度となる。また、『更紗図譜』でも、水につけた「黄豆（しろまめ）」5勺を擦り、2合の水を入れて木綿袋で濾す。濃度は20%となる。

一方、『紺屋茶染口伝書』下巻の「第一 まめの引やう」の項をみていくと以下のような記述が見られる。

惣じてきぬのたぐひ。地のおつき物には。まめなるほどこくして引申候。又地あひうすきものには右之よりうすくして引申候。とかくもめんにてきぬにても。地あひやうすを見はからひかんように候。
『紺屋茶染口伝書』「第一 まめの引やう」¹⁶⁾

ここには、木綿でも絹でも生地が厚いものには豆汁を濃く引き、薄い物には薄く引くとある。対象が木綿ならば、塗布する豆汁の濃度が濃いと付着する染料が多くなるため濃く染まり、少なければ薄く染まる。

しかし、絹はたんぱく質であるため、無地に「染める」だけならば、新たにたんぱく質を付加する必要はない。その点から言えば、この生地が厚さによる濃度の調整は、色の濃淡が目的ではなく、型染した場合の効果や、刷毛むらの防止等の表現効果を考えたものと思われる。型染に関する効果については2-2にて後述する。

2. 『紺屋茶染口伝書』（寛文6〈1666〉年）に見られる「まめ」の役割

豆汁には、 α -アミノ酸類からなるたんぱく質が可溶性のコロイド状に含まれており、これが経時変化や蒸熱によって凝固し、不溶性のたんぱく質に変化する。つまり、豆汁は生地の上で凝固して不溶性たんぱく質に変化するため、水元でも流れ落ちず、生地に残る¹⁷⁾。現在でも行われている地入れ工程を例に豆汁利用のメカニズムを整理する（図1）。

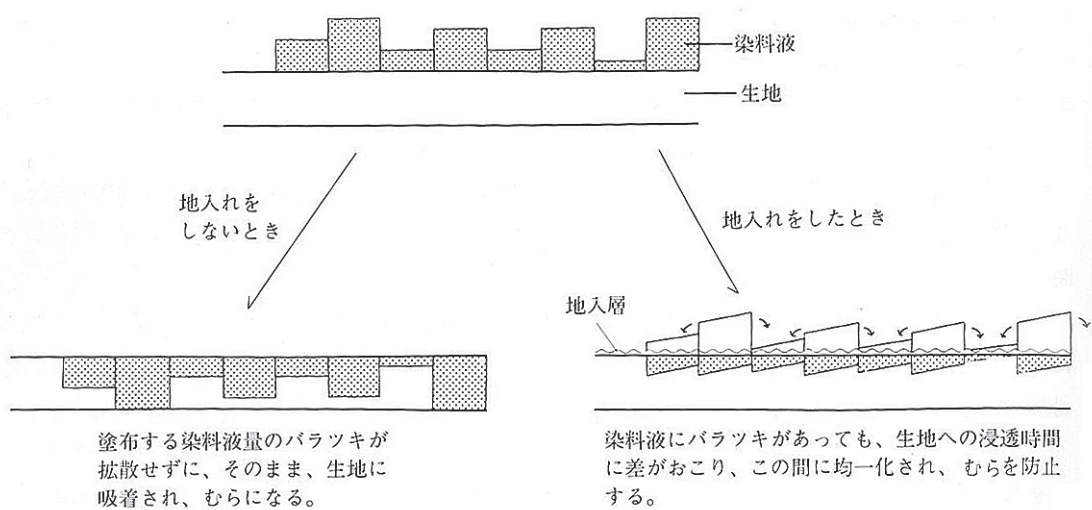


図1 豆汁引き（地入れ）のメカニズム

（『手描友禅染の技術と技法』手描友禅染技術・技法調査委員会監修、昭和59〈1984〉年、京都市染織試験場136頁より転載）

まず、豆汁を引くことで、生地上に豆汁の層が作られる。その豆汁の層があるため、豆汁が乾燥する前であっても染料液は急速に生地へは浸透せず、徐々に浸透していく。この時間差を利用することで、染料液を制御し、均一化が図られる。つまり、染料の浸透速度を遅らせることで染料がゆっくりと生地内を均一に浸透するため、むらが防止される。さらに豆汁は乾燥すると不溶化して防染効果が得られる。このような豆汁の性質が近世の染色技法の発展を可能にしたと考えられる。つまり、この見えない豆汁こそが、友禪染や型染などの日本の染色技法を可能にしているともいえる。

2-1 染着剤としての「まめ」

同書に出てくる「まめ」の多くは、白・鼠・黒・黒茶といった色名が接頭語として付けられている。これは豆汁に白や黒の色材を加えたものと考えられる。『日葡辞書』（慶長8〈1603〉年刊）¹⁸⁾には下線のような説明がある。

「Go」

碾いた豆と他のものとで作る一種の染料で、これで染色をし、他の染料の色があせないようにするためのもの

「Gobachi」

染物師がGoという、ある染料を入れる土製か金属製の鉢、または、木の鉢

この記述からは『紺屋茶染口伝書』が刊行される約60年前、江戸時代初頭の段階で、豆汁（豆と水）は色材と混ぜ合わせて使われていたと推測ができる。先述したように豆汁は、乾燥前は顔料と混ぜることが可能であり経時変化や蒸熱によって、生地の上で顔料を伴いながら凝固する¹⁹⁾。つまり、顔料を生地上に接着させる役割を果たす。管見の限りでは、『染料植物譜』所収の染色技法書には、豆汁に墨、弁柄、藍を混ぜたものが確認された。例えば、同書の5年前に刊行された『聞書秘伝抄』では下線で示したように豆汁に墨を混ぜ合わせている。

ゆゑんのすみを二ちやうほどすゞりにてすり。まめのごをうすくのべて。したぞめをこいあさぎにそめ。まへのごをうすくのべてすみをすこしづゝ入。いくへんも色のよくつくまでそめべし。色よきじぶんきぬはりにかけ。しいしをかひそのうへ水をさいくかけ。四五へんも水ばりをすべし。色よくおちざるなり。／○ごすみにてそめたるまくのもん。そのほかごすみのそめ物あめにあふてもおちぬやうあり。きりの木のみなましきをきぬにつゝみひしきて。ごすみのうへをすりつけべし。一月も二月も雨にあふてももんおちざるなり。

『聞書秘伝抄』「くろちやそめの事」²⁰⁾

また、『萬染物張物相伝』（元禄、宝永期）²¹⁾や『錦囊智術全書（拾玉続智恵海）』（～嘉永4〈1851〉年）²²⁾でも、墨と混ぜて色を付けた豆汁を引染しており、ここでも豆汁には墨という顔料をとめる接着剤としての効果が示されている。これらの記述を鑑みると、『紺屋茶染口伝書』に出てくるこの鼠・

黒といった色の調整は墨によるものと推測される²³⁾。同書では「まめ」を引く回数はそれぞれの色により異なるが、「ねずみほなるまめ」、「中ねずみほなるまめ」、「くろきまめ」というように徐々に色の濃い豆汁を重ねている。薄い色から徐々に濃い色を重ねていくことにより、求めている色相へ近づけていると考えられる。

また、白については何も色材を加えていない「豆汁」そのものか、あるいは白い色材を加えたものであるかを検討する必要がある。先述したとおり、豆汁を黄豆（しろまめ）と称していた例もあること²⁴⁾等から、豆汁そのものを示している可能性がある²⁵⁾。一方、『紺屋茶染口伝書』では下線で示した通り「まめ」と「しろまめ」は書き分けられている。

かたつけて。しろまめこく候を一ぺん引。又うすねずみほなるまめ一ぺん引。其うへに右之より少こく候まめ一ぺん引。又其上にかりやすを二へん引。うへのとめにかりやすにみやうばん少くわへ。一ぺん引。ほしあげてしゝくりにかけて。こきあいに右あをちやより少まをあらせそめ申候。但こもんにてもちらしにてもかくのごとくに候。

『紺屋茶染口伝書』「第十三 もえきこもん」²⁶⁾

ここでは、型糊をおいたすぐ後には「しろまめ」を、さらに「うすねずみほなるまめ」を引いたあとに、少し濃い「まめ」を1回引き、刈安という黄色系の植物染料を引いている。「もえきこもん」の色称から、緑色の小紋模様を表すと考えられ、刈安に明礬で媒染した後に、藍で染め重ねて緑色を出している。この「しろまめ」と「まめ」が同義であるかは定かではないが、両者が別なものであるとすれば、「しろまめ」は色材として白の色材を加えている可能性も考えられる。精練がそうであるように、色を重ねる前段階では土台となる生地を白くすると発色がよくなる。色の再現性を考えると白い色の上に新たな色を重ねていくことは効果的であり、その上でも白い色材を入れた豆汁を引くことは理に適っている。

2-2 型染における「まめ」の役割

同書は上下25項目中17項目が型染に関するものである。型染の場合、多くは型糊をおいたあとに「しろまめ」をひいている²⁷⁾。前述したように、豆汁を引くことで、糊を置いた生地の上に豆汁の層ができ、染料の浸透を制御する。豆汁は、生地だけでなく、糊に染料の水分が浸透する速度も抑える。型を置くときに用いる糊は米粉と糠、石灰を混ぜて作られているため、糊に水分が浸透するとふやけて柔らかくなる。糊が柔らかいと刷毛で引いたときに型付された糊を壊す危険性が増す²⁸⁾。それを防ぐために型付（糊をおいた）の後、豆汁を引くという工程があると考えられる。この順序で行うことでその後の水分を伴う染色作業が格段にしやすくなるのである²⁹⁾。下巻の「第廿四 うすがき」では無地染と型染（こもん）両者の「まめ」引きについて次のように言及されている。

すなはちうすがきつちをば。ねばりとすりてしろまめうすくして土にまで合て無地ならは一ぺんこもんならに二へんひき申候。

『紺屋茶染口伝書』「第廿四 うすがき」³⁰⁾

これは、「うすがきつち」を「ねばり」と摺って、うすい「しろまめ」と合わせ引いている。この記述からは同じ色を染める場合、無地だと1回、「こもん」（小紋模様の糊）を置いた時は2回、豆汁を引くことが分かる。つまり、型糊をおいたほうに念入りに豆汁が引かれるのである。糊を置くということはその部分だけ染まらなくするということであり、白場をにじみが少なく模様の境目を美しくする必要があるのである。豆汁を引かずに染色作業を行うと、繊維の中を速い速度で染料が浸透するので、糊をおいている部分にも染料が入り込みやすくなり、にじみとして表れやすくなると考えられる。糊の保護のためにも、染め分ける染色においても豆汁を塗布しておくことは有用である。

2-3 色止め（コーティング）としての「まめ」

先述の通り、豆汁は乾燥すると防染効果が得られる。『紺屋茶染口伝書』においては、色止めとしては刈安に明礬を加えるものが大半である。しかし、僅かながら豆汁を使用したものも見られる³¹⁾。「第十五 かばがえし」と「第廿六 くりむめこもん」では「うすねずみほどなるまめに石灰を少し加え」たものを「うえのとめ」とし、「第廿七 同くりむめ無地」では「中ねずみ程なるまめに石灰を少し加え」たもの、「第廿八 べにかき」では「しろまめに石灰を少し加え」たものでコーティングしている。

嘉永年間には成立していた資料である『錦囊智術全書（拾玉智恵海）』³²⁾と『染物早指南』³³⁾にも色止めとして豆汁が用いられている記述がある。ここからは江戸時代を通じて豆汁が染色した後に色止めとして用いられていたことが理解できる。

2-4 均整（にじみ止め）としての「まめ」

『紺屋茶染口伝書』の「第廿 あかべにかのこ」には以下の記載がある³⁴⁾。

かたつけて。しろまめこく候を三へん引。又其上にすはう四へん引。但一へんくにてほしつけて水みやうばんを粉のふくほどあはせ。とめに引申候但此そめやう大事にて候。もしすはう引申候ときうらへしみ候は、。又しろまめを一へんにても二へんにてもうらへくゝらぬやうに引申候事かんようにて候。但きぬにてももめんにてもおなじ事にて候。

『紺屋茶染口伝書』「第廿 あかべにかのこ」³⁵⁾

ここでは豆汁を引くことで染料が裏面へまわってしまうのを防ぐ効果があると示している。これは2-3で述べた、豆汁の乾燥することによる防水効果を使ったものであるが、寛文期において豆汁のこのような効果について言及されているのは特筆すべき事項といえる。

このことは近年研究が発表されている「友禪染」への技法的変遷を考察するうえで重要な示唆を与えているといえるのではないだろうか³⁶⁾。顔料に接着剤（油・膠等）を混ぜ生地に色を乗せることと、水で流さなければならない糊を生地の上に置き、さらに生地内に水分と共に浸透してしまう染料を挿すのでは土台の生地への下準備が異なるといえる。瀬藤貴史桜美林大学講師によれば現在の友禪染は糸目糊という土手を作り、きりふき等で糊を壊さぬように注意しながら水を引き（水地入れ）、次に

濃度の薄い豆汁を生地全体に引く（地入れ）、さらに濃度の濃い豆汁を模様の部分のみに入れる等の工程を踏むという。つまり濃度の異なる豆汁を使い分けて裏側に染料がまわらない土台を作り、その上で、糸目糊を置き、多色に染め分けるのである。

友禪染は『友禪ひいなかた』（貞享5〈1688〉年）に「絵の具水にいりておちず 何絹（なにきぬ）にかきても和（やわらか）也」とあるように絹の風合いを損なわないことを謳い文句としている³⁷⁾。絵画では、絵絹に礬砂や膠を引くが、そうすることで生地自体が固くなる。それらに比べると豆汁は引いても柔らかい質感が残されており、人が着用するという用途から考えても豆汁は非常に都合のよい材料であったといえる³⁸⁾。このような効果は後の『更紗図譜』（天明5〈1785〉年）³⁹⁾には「染料を挿し」やすくする均整（にじみ止め）としての効果として記されるようになる。

3. まとめ

今回着目した『紺屋茶染口伝書』からは寛文年間、濃度の異なる豆汁を使い分け、さらに顔料を混ぜたものが使用されていたこと、また、使用されるタイミングは染色や型付（模様をつけるために型紙で糊を置く作業）の前後など、多岐にわたっていた事が明らかになった。それは、豆汁には接着、糊の保護、色止め（コーティング）、そして均整（にじみ止め）、という4つの役割があるためであろう。江戸時代の染色技法はこれら豆汁の効果を最大限に生かしていたと考えられる。

4. 今後に向けて

このように豆汁は、現在に受け継がれた我が国の染色技法に欠かすことのできない材料として多用されていた。豆汁は目視では確認ができないが、染織文化財の多くに未だ付着していると考えられる⁴⁰⁾。インド更紗では地入れに牛乳が使用されている。日本では豆、インドでは牛乳というように、この目的に使用されるたんぱく質は国によって異なると考えられる。つまり、この情報を整理していくと、更紗などの生産地が国内であるか、あるいは国外であるのかを特定するのに有用な情報を得られる可能性がある。本年度、本研究所では東京芸術大学美術学科染織研究室との共同研究において試験布を制作してもらっている。来年度以降、それらの実験を計画している。今後も近世における染織技法の解明、さらには染織文化財の保存修復に寄与する情報が得られることを期待しながら、他の資料も情報整理を進めていきたい。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり瀬藤貴史氏（桜美林大学講師）には『紺屋茶染口伝書』の記載内容について技術的な面からご指導いただきました。巻末に資料として同氏の解釈を掲載いたします。なお、石井美恵氏（世界遺産国際協力センター客員研究員）、牛村仁美氏、伊藤恵里子氏、志村映美氏には資料の整理等助けていただきました。記して感謝いたします。

資 料

瀬藤貴史解釈『紺屋茶染口伝書』

『上』

第二十三 けんぼう よしをか乃家の口伝

もも（ヤマモモ、楊梅）樹皮からの抽出染液にて3回染める（浸染？）。

次に、鉄媒染溶液にて1回媒染し、乾燥。

このあまりの鉄媒染溶液（カネ）を用いて、さらに1回染める。

濡れているうちに濯ぐ。

次に、モモ樹皮からの抽出染液にて、3回染める。

次に、先述のように鉄媒染溶液（カネ）にて媒染する。

次に、さらに桃樹皮からの抽出染液（カネ）にて、3回染める。

次に、先述のように鉄媒染溶液にて媒染した後、濯ぎ乾燥する。

最後の色止めとして桃の樹皮からの抽出染液を1回染めれば、剥げなどはない。

以上のように、桃の樹皮からの抽出染液10回。

通常の鉄媒染溶液3回。使用後の媒染液3回。

以上6回媒染を行う。

同 もめんのそめやう

もも（ヤマモモ、楊梅）樹皮からの抽出染液にて3回染める（浸染？）。

先述にあるように鉄媒染溶液（カネ）にて1回媒染。

次に、もも（ヤマモモ、楊梅）樹皮からの抽出染液にて3回染める。

次に、鉄媒染溶液（カネ）にて1回媒染して止める。

これも最後には、もも（ヤマモモ、楊梅）樹皮からの抽出染液を1回用いる。

小紋染などをこのように染める場合は、

型を置き、白豆（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を2回引く。

次に、中ねずみ（中灰色よりも濃い顔料入り豆汁）を1回引く。

裏側へ鉄媒染の媒染液（カネ）が染込まなくなるように豆汁を引く。

前述した木綿染めのように伸子にかけて引く。

但し、紋などの箇所について全体的に白い部分に黒いシミが付いてしまった場合には、梅の酢にて落とす事ができる。もし、梅酢が無い場合には、ゆ（柚？）の酢でも同じ作用である。

『下』

第一 まめの引やう

絹全般について。厚地の生地には、豆汁（豆）の濃度を上げて用いる。

また、薄い生地には、厚い生地の時よりも濃度を下げて引く。

とにかく、木綿でも絹でも、生地の様子や厚みについて良く観察することが大切（肝要）である。

『下』

第五 つねの茶こもん

型を用いて糊置きをする。しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、淡灰色顔料入（うすねずみ程なる）豆汁を1回引く。

次に、中灰色顔料入（中ねずみほどなる）豆汁を1回引く。

次に、刈谷抽出染液を2回引く。刈安は引くたびに干して乾燥する。

最後に、刈安抽出染液に明礬を少々加え引く。

『下』

第六 みるちやこもん

型を用いて糊置きをする。しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、中灰色顔料入（中ねずみ程なる）豆汁を1回引く。

次に、濃灰色顔料入（こいねずみ程なる）豆汁を1回引く。

次に、刈安抽出染液を2回引く。

最後に、色止めして刈安抽出染液に明礬を少々加えたものを引く。

『下』

第七 きがらちやこもん

型を用いて糊を置く。

しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を3回引く。

次に、刈安抽出染液を3回引く。

最後に、色止めして刈安抽出染液に明礬を少々加えた液を1回引く。

『下』

第八 えどちやこもん

型を用いて糊を置く。

次に、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を2回引く。

次に、淡灰色顔料入豆汁（うすねずみ程なるまめ）を1回引く。

次に、刈安抽出染料を2回引く。

最後に、刈安抽出染液に明礬を少々加えたもので色を止める。

『下』

第九 からちやこもん

型を用いて糊を置く。

しろまめ（胡粉入り豆汁）を1回引く。

次に、淡灰色顔料入り豆汁（うすねずみほどなる豆）を2回引く。

次に、中灰色顔料入り豆汁（中ねずみほどなる豆）を1回引く。

次に、梅の木片（または樹皮）（むめ：梅）と刈安、それぞれ煮出した染料を半分合わせ、2回引き染める。

最後に、刈安抽出染料に明礬を少々加えた染液で引き染める。

『下』

第十 あをちやこもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料入り豆汁（ねずみ程なるまめ）を1回引く。

次に、中灰色顔料入り豆汁（中ねずみ程なるまめ）を1回引く。

次に、刈安抽出染料のみを2回引く。

次に、刈安抽出染料に明礬を加えた染液を1回引く。

干して、（伸子？にかけて）、薄い2番藍にてさっと染める。

濡れているうちに、濯いで干す。（水の中での酸化発色の可能性あり）

とにかく、藍の染める作業は、短時間で染める事が大切。

『下』

第十一 こびちやこもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁）を1回引く。

次に、灰色顔料を含ませた豆汁を1回引く。

次に、黒茶の（黒+茶顔料？）豆汁を1回引く。

次に、わかき（緑系顔料？あるいは、豆自体の緑を使用？）豆を1回引く。

次に、刈安抽出染液を2回引く。

最後に、刈安抽出染液に明礬を少し加えたものを引く。

『下』

第十二 との茶こもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料を含ませた豆汁を1回引く。

次に、中濃度の灰色顔料を含ませた豆汁を1回引く。

次に、刈安抽出染液を1回引く。

次に、モモの樹皮（ももかわ：ヤマモモ、楊梅）抽出染液を2回引く。

最後の色とめとして、刈安抽出染液に明礬を少し加えた染液を引く。

『下』

第十三 もえきこもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料（淡色）を含ませた豆汁を1回引く。

次に、前に使用した豆（豆汁）より少し濃い濃度の豆汁を1回引く。

次に、刈安抽出染液を2回引く。

次に、色止めとして、刈安抽出染液に明礬を少し加えて1回引く。

干して乾燥後、伸子（「しゝくり」にかけて）にかけて、濃い藍に先に述べた「あおちゃ」を染める
ときよりも、少し時間をかけて染める。

但し、「小紋」でも「散し」（小紋よりも大柄で模様が緻密でないもの）でも同様。

『下』

第十四 むじ

下地処理として、しろまめ（胡粉入り豆汁）の薄いもの（豆濃度 薄）を1回引く。

次に、うすはな色に染める。

次に、刈安抽出染液を4回引く。

色止めに、刈安抽出染液に明礬を少々加えたものを1回引く。

干して乾燥後、

上をさっと藍にて染め、そのまま濯ぐ。

『下』

第十五 かばがへし

下地処理として、梅の樹皮より煮出した染液を2回引く。

モモの樹皮（モモかわ：ヤマモモ、楊梅）より煮出した抽出溶液を1回引く。

次に、刈安抽出染液に明礬を少量加えたもので1回引く。

濡れたままの状態、濯ぎ干して乾燥。

この上に、型を置く。

しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）の濃いものを1回引く。

次に、灰色顔料（中濃度）を含む豆汁を1回引く。

次に、黒い顔料を含む豆汁を1回引く。

次に、灰色顔料（淡）を含む豆汁に極少量の石灰を加え、止めとして1回引く。

『下』

第十七 ねずみかへし

下地の染めとして、浅葱色に染めておく。

次に、型を置く。

次に、しろまめ（胡粉入り豆汁）の濃いもの（豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料（中濃度の色）を含む豆汁を1回引く。

『下』

第十八 くろ茶けんぼうこもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁）の濃いもの（豆濃度 濃）を1回引く

次に、灰色顔料（中濃度の色）を含む豆汁を1回引く。

次に、黒色顔料（特に高濃度の黒色）を含む豆汁を1回引く。

次に、モモの樹皮（ももかわ：ヤマモモ、楊梅）より煮出したから抽出染液を2回引く。

色止めとして、カネ（鉄媒染溶液）を1回引く。

『下』

第十九 くろべにかのこ

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁）の濃いもの（豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料（普通濃度の色）を含む豆汁を1回引く。

次に、黒色顔料（普通濃度の黒色）を含む豆汁を1回引く。

次に、蘇芳の木片より抽出染液を2回引く。

色止めとして、カネ（鉄媒染溶液）に明礬を少量加え引く。

『下』

第二十 あかべにかのこ

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁）の濃いもの（豆濃度 濃）を3回引く。

次に、蘇芳の木片より抽出染液を4回引く。

ただし、1回毎に干して、水に明礬を多く溶かした液を引き、各回の色止めとする。

1回毎に色止めをする事が大切である。

もし、蘇芳の抽出染液を引いた時に裏に染込むのであれば、しろまめ（胡粉入り豆汁）の濃いもの（豆濃度 濃）を1回でも2回でも引く回数を増やし、裏に染込まないようにすることが肝要である。

これは、絹でも木綿でも同様である。

『下』

第二十一 むらさきかのこ

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁）を1回引く。

次に、灰色顔料を含む豆汁を1回引く。

次に、灰色顔料（中濃度）を含む豆汁を1回引く。

次に、蘇芳の木片より抽出染液を3回引く。

色止めとして、カネ（鉄媒染溶液）に明礬を少量加えたもので引く。

『下』

第二十二 とくさ

もえぎのわかい色。

しろまめ（胡粉入り豆汁）を1回引く。

次に、（藍にて）少し濃い目の浅葱色に染める。

後の工程は、もえぎ色染めと同じ工程である。

もえぎ 無地

下地処理として、しろまめ（胡粉入り豆汁）の薄いもの（豆濃度 薄）を1回引く。

次に、うすはな色に染める。

→ この工程以降を行うと考える。

次に、刈安抽出染液を4回引く。

色止めに、刈安抽出染液に明礬を少々加えたものを1回引く。

干して乾燥後、

上をさっと藍にて染め、そのまま濯ぐ。

『下』

第二十三 くろかき無地

下染めとして梅の樹皮より煮出した染液を2回引く。

次に、灰色顔料（中濃度）を含む豆汁を1回引く。

最後に、黒顔料を含む豆汁に石灰を少量加え2回引く。

『下』

第二十四 うすがき

薄柿色の土をもちいる。

「ねばり」をすりつぶす。（植物系？布海苔？）

同時に「うすがき土」もすりつぶす。

次に、しろまめ（胡粉入り豆汁）の薄いもの（豆濃度 薄）と先にすりつぶした「土」「ねばり」と合わせ、無地ならば1回引く。

小紋ならば、2回引く。

『下』

第二十五 かきこもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料（普通濃度）を含む豆汁を1回引く。

次に、梅の木片（または樹皮）から抽出した染液を3回引く。

次に、灰色顔料（淡い濃度）を含む豆汁（豆濃度 濃）に石灰を少し加えて2回引く。

『下』

第二十六 くりむめこもん

型を置いて、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 濃）を1回引く。

次に、灰色顔料（普通濃度）を含む豆汁を1回引く。

次に、灰色顔料（中濃度）を含む豆汁を1回引く。

次に、梅の木片（または樹皮）から抽出した染液を3回引く。

次に、灰色顔料（中濃度）を含む豆汁（豆濃度 濃）に石灰を少量加えたもので2回引く。

『下』

第二十七 同くりむめ無地

下地として、梅の木片（または樹皮）から抽出した染液を2回引く。

次に、灰色顔料（中濃度）を含む豆汁（豆濃度 濃）に石灰を少量加えたもので2回引く。

『下』

第二十八 べにかき

下地として、梅の木片（または樹皮）から抽出した染液を4回引く。

次に、しろまめ（胡粉入り豆汁 豆濃度 普通）に石灰を少量加えたもので4回引く。

《注》

1) ①片岸博子「江戸時代の染色技法書に現われた色名について 茶色に関する一考察」『家政学研究32(2)』奈良女子大学、1986年、162-170頁。

②片岸博子「江戸時代の染色に関する研究(2) 鼠色に関する一考察」『家政学研究33(2)』奈良女子大学、1987年、107-113頁。

③片岸博子「江戸時代の染色に関する研究(3) 納戸色に関する一考察」『家政学研究34(2)』奈良女子大学、1988年、107-113頁。

④片岸博子「江戸時代の染色技法書にみる色彩の認識と色名の使い分けについて」『家政学研究39(2)』奈良女子大学、1993年、80-93頁。

⑤和田淑子、片岸博子「梅染の色相について」『帝塚山工芸3』帝塚山大学、1994年、84-94頁。

⑥和田淑子、片岸博子「江戸時代の染色技法書にみる茶色染色の検討」『帝塚山短期大学紀要 人文・社会科学編・自然科学編32』帝塚山大学、1995年、177-191頁。

⑦片岸博子「江戸時代における茶色の認識に関する一考察 その1濃茶・薄茶について」『日本服飾学会誌(16)』服飾文化学会、1997年、11-18頁。

⑧片岸博子「江戸時代における茶色の認識に関する一考察 その2下染茶について」『日本服飾学会誌(17)』服飾文化学会、1998年、25-32頁。

- ⑨片岸博子「江戸時代における茶色の認識に関する一考察 その3灰汁茶・鶯色について」『日本服飾学会誌(17)』服飾文化学会、1998年、33-38頁。
- ⑩片岸博子「『染物重宝記』にみる茶色の分類と色上げ染直し」『日本服飾学会誌(19)』大阪薫英女子短期大学松本敏子研究室、2000年、99-105頁。
- 2) ①石井美恵、長崎巖、伊藤紀之 [他]「天然黄色系染料の高速液体クロマトグラフィーによる分析と近世小袖裂の黄系 緑系染色布の染料同定」『文化財保存修復学会誌49』文化財保存修復学会、2005年、41-58頁。
- ②石井美恵「江戸時代の染色技法書にみられる黄色系天然染料」『服飾文化学会誌7(1)』服飾文化学会、2006年、1-10頁。
- 3) ①福岡裕子、齊藤昌子「共立女子学園所蔵「猩々緋羅紗地蛇の目紋陣羽織」の科学的分析と歴史上の位置づけ」『服飾文化学会誌6(1)』服飾文化学会、2005年、21-29頁。
- ②小松未来、西岡文夫、齊藤昌子「12～19世紀の甲冑威糸類に用いられた赤色染料と媒染剤について」『文化財保存修復学会誌49』文化財保存修復学会、2005年、25-40頁。
- ③福岡裕子、齊藤昌子「江戸時代の陣羽織に用いられた舶載赤色毛織物 その色と染料および媒染剤について」『文化財保存修復学会誌 古文化財之科学51』文化財保存修復学会、2006年、38-50頁。
- ④福岡裕子「江戸時代後期の陣羽織に関して (特集 江戸の民族藝術)」『民族芸術22』民族芸術学会、2006年、80-87頁。
- ⑤福岡裕子、河島一恵、長崎巖 [他]「墨資料館所蔵陣羽織の形態、材質、加飾技法の特徴と歴史的位置づけ」『服飾文化学会誌7(1)』服飾文化学会、2006年、71-90頁。
- 4) ①福岡裕子、笠作奈樹、齊藤昌子「共立女子学園所蔵「紫呉呂地隅入菱に女篠笹紋陣羽織」の科学的分析と歴史的考察」『共立女子大学家政学部紀要(52)』共立女子大学、2006年、1-11頁。
- ②深津裕子、笠作奈樹、齊藤昌子「江戸時代後期陣羽織に用いられた紫色毛織物の素材と技法の分析」『文化財保存修復学会誌 古文化財之科学(53)』文化財保存修復学会、2008年、20-34頁。
- 5) 平成15～19年度私立大学学術研究高度化推進事業「産学連携研究推進事業」『江戸時代の小袖に関する復元的研究』関西大学アート・インスティテュート、研究代表者河上繁樹
- 6) 土井一二三「染色の際の豆汁(ご)引きに関する一考察」『大阪学芸大学紀要 B 自然科学(10)』大阪学芸大学、1962年、238-243頁。
- 7) 稲垣和子「染色に於ける呉汁の研究-1-」『奈良学芸大学紀要9巻2号』奈良学芸大学、1960年、77-81頁。
- 8) 長野まつ・阿部けい子「手芸染色に於ける大豆汁の応用について」『大阪女子学園短期大学紀要1』大阪夕陽丘学園短期大学、1957年、9-12頁。
- 9) 『染料植物譜』後藤捷一、山川隆平編、昭和12(1937)年。
- 「白まめを貳合程水ニつけ。すり鉢ニてよくすり水壹升程入。もめんノ切ニてよくこし。」「屋なきすすたけ」929頁参照。
- 「右ハマめ貳合程よくまへかたのとをりすり水壹升程入。もめんのきれニてよくこし。」「ふじい

- ろそめ」『萬染物張物相伝』元禄、宝永期、930頁参照。
- 10) 「白豆を水にふやかし置。水を少し入て能摺つぶし切れに包て絞出し金巾を板の上に置。」「急ニ書様の事」『更紗便覧』安永7〈1778〉年、註9前掲書670頁参照。
- 11) 「是に黄豆（しろまめ）五勺を水に漬て。夏は一夜。冬は一日一夜許つけおき。摺鉢にてよくすり。水二合許入れ。木綿の袋に入れて。其滓の堅くなるほどによくしぼりたる。其汁をゴといふ。」「更紗を描下地こしらへやうの事」『更紗図譜』、註9前掲書695頁参照。
- 12) 「大豆十粒ばかりをひしぎ水につけ置。しばらくして摺鉢へ入てすり。布に包しぼり。此汁をゴといふ。」「染入紋の法」『錦囊智術全書（拾玉智恵海）』、註9前掲書860頁参照。
- 13) 「大豆 水に三日斗浸し、水を捨。大豆を摺鉢にてよくすり、こしてしぼり」「幕の紋書やうの傳」『錦囊智術全書（拾玉續智恵海）』、註9前掲書864頁参照。
- 14) 「豆汁 通言すべてゴといふ／生豆を水に浸し置。招碎き漉て遺ふ。」「染汁の部」『染物早指南』、註9前掲書891頁参照。
- 15) 『日本国語大辞典』（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編第二版、小学館、2000年12月－2002年12月）によれば、大豆は原産地が中国北部といわれ、朝鮮半島を経て日本に伝来した。縄文時代の遺跡からも大豆の炭化物が発見されていること、平安時代の『延喜式』（延喜5〈905〉年）の畑作事情を示す記事の中に大豆の生産地が13か国もみられることから、中世にはすでに身近な素材になっていたと推測される。また、近世にはいると、土地を選ばない大豆は重宝され、『清良記』（日本農書全集10『清良記（親民鑑月集）・他』所収、土居水也他著、徳永光俊他解題、農山漁村文化協会（農文協）出版、昭和55〈1980〉年）には麦と大豆の輪作についてなどの記述もみられる。大豆は近世においては手に入りやすい材料であったといえることができる。
- 16) 註9前掲書590頁参照。
- 17) 『手描友禅染の技術と技法』、京都市染織試験場、昭和59（1984）年、135頁参照。
- 18) 『日葡辞書』（『邦訳 日葡辞書』、岩波書店、昭和55〈1980〉年、303頁参照）。
- 19) 註17前掲書135頁参照。
- 20) 『聞書秘伝抄』「くろちやそめの事」註9前掲書571頁参照。
- 21) あをちやいろ（932頁）、くろかき（933-935頁）、ねつミいろ（935頁）、ふじねつミ（935頁）、ふじすすたけ（936頁）（『萬染物張物相伝』元禄宝永期、）註9前掲書参照。
- 22) 註9前掲書864頁参照。
- 23) 片岸氏も註1②前掲書(22頁)の中で『紺屋茶染口伝書』に見られる「ねずみまめ」を墨と豆汁を混ぜたものと解釈している。
- 24) 『更紗図譜』註9前掲書695、697頁参照。
- 25) 片岸氏も註1④前掲書(85頁)に見られる「しろまめ」は豆汁のみであると解釈している。
- 26) 註9前掲書592-593頁参照。
- 27) 型染で「しろまめ」を引かないものは下巻「第十六 かばむち」（目次にはおなじく無地とある）のみであり、ここでは「しろまめ」のかわりに「むめ」を引いている。註9前掲書参照。下巻「第九 からちやこもん」と「第廿一 むらさきかのこ」は濃度についての言及はないが他の項に関し

ては濃い「しろまめ」を引いている。

28) 『紺屋仁三次覚書』「小紋形仕よふの事」には「一、先上ごらしハ小紋共ハ小ぬかニ。又酒屋衣の上より下り口灰の壹升ニ付百四拾文も仕灰を入レ申也。小ぬかのたひニ右之通り入るゝか形きわよろしく。花色ニ形付を染め申ときハまつ形付のうらの方より引ほし上ケ。その上へまたおもてよりごをいれほし上ケ染ル也。よろしきとき也。但シゴハこゆくいたすべし。／一、きんものハひのるいのよふなるものハ形つけぬまへニごを入レ。上に形をつける也。いつれ形付小紋ハ二へんご入レ申がよし。はけかろくいたし。しめるかしめらぬよふニいたして引也。それしつくりとしめりてハ形どしミよろしからず。(下略)」とあり、型付と豆汁引きの順番や、刷毛の加減や生地への浸透具合に関心があることが理解できる。註9前掲書723.724頁参照。

29) 現在、長板中形の技法でも型付の後、豆汁引きという工程がある。この工程は、藍染を行う前に反物を水につけるため、豆汁引きを行わないと糊同士がくっつき、型糊が壊れることを防ぐために行うという。

30) 註9前掲書595頁参照。

31) これらのほか『紺屋茶染口伝書』では下巻「第十八 くら茶けんぼうこもん」でも「かね」、「第十九 くらべにかのこ」では「かねにみょうばん」をそれぞれ引くとある。註9前掲書593-594頁参照。

32) 「(前略) 此ごにて紋の上を一へんとめるなり。洗ひてもはげる事なし。」(「染入紋の法」『錦囊智術全書(拾玉智恵海)』註9前掲書860頁参照)

33) 「豆汁 すべて地合をしめて染色をとめるものなり。(下略)」『染物早指南』註9前掲書891頁参照。

34) この「かのこ」は鹿の子絞りの「かのこ」とは異なり、型鹿子を示すと考えられる。

平成15～19年度私立大学学術研究高度化推進事業「産学連携研究推進事業」研究成果報告書『江戸時代の小袖に関する復元的研究』関西大学アート・インスティテュート、研究代表者河上繁樹、平成20(2008)年、8-9頁参照。

35) 註9前掲書594頁参照。

36) 河上繁樹「江戸時代の小袖に関する復元的研究」について-関学アート・インスティテュートの研究からⅢ-参照、平成21(2009)年、1-20頁参照。

高木香奈子「貞享・元禄期の友禅染について」『美学論究』23号、2008年、21-39頁参照。

37) 「友禅ひいなかた」山辺知行・上野佐江子編『小袖模様雛形本集成』、昭和49(1974)年参照。

38) 豆汁も濃度が濃いものを大量に引くと生地が固い質感になるため、全体に引くときには薄く、部分では濃く、あるいは薄い豆汁を重ねるなどの工夫が現在ではされている。

39) 「(前略) 其汁をゴといふ。其ゴを西洋布(かねきん)の表より一遍ひき。乾て裏より二遍引き。各よく乾して其地合を試るには指に水を付て。其のしたゝりを一滴西洋布の表におとし見るに露の玉をなし。地へしミこむをよきかげんとす。又そのまゝちるはゴのきかざるなり。それにハ今一遍ゴを引べし。其後此西洋布を猪牙にて表よりよく摺て描也。(下略)」『更紗図譜』註9前掲書695頁参照。

40) 註17前掲書135頁参照。

The Role of Soybean Juice as Seen in Texts on Skills for Dyeing:
With Focus on *Kon'ya chasome kuden sho* (1666)

KIKUCHI Riyo

This fiscal year, the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo started to conduct fundamental research on materials and techniques related to textile cultural properties. Until now, most research on textiles has focused on styles and designs, and not much comprehensive research has been made that looks into materials and techniques. Of the materials used in textile cultural properties, that whose information is least organized systematically is “soybean juice.” In this paper, attention is given to soybean juice as a dye material and its use and effects are studied through an examination of *Kon'ya chasome kuden sho* published in 1666.

Today, soybean juice is used in *jiire*, a process required in *yuzen* dyeing and stencil dyeing just before dyeing. This *jiire* process promotes the infiltration of dye solution into the fabric and its moving about in the fabric while at the same time preventing uneven dyeing. According to *Kon'ya chasome kuden sho*, soybean juice of different concentration or soybean juice mixed with pigments was used. The process in which it was used also varied from before and/or after the process of dyeing to that of marking out. Such variations are thought to have been made so as to produce the desired color. It is hoped that studying information about soybean juice, to which attention had not been given much until now, will one day lead to the elucidation of many of the other skills that have already disappeared.